

第4章 古墳時代の遺跡と遺物

4.1 あらまし

古墳時代は、前代の弥生時代を通じて生産力を向上させてきた畿内をはじめとする各地域の首長が、墓の造営に大きな努力を傾注した時代である。さらに、前方後円墳という定型化した墳丘、石製腕飾類や銅鏡などの特殊な遺物を通じて、畿内中枢の勢力と種々の関係をもちながら各地で巨大な墓や特異な墓造りの文化が各地で開花していった時代である。

そして、単に首長や一部の有力者のみにとどまらず、かなり下層にいたるまで墓造りに情熱を燃やす時代であったようで、高い盛土(墳丘 高塚)をもつものばかりでなく、墳丘がほとんどないものや崖に横穴を穿って墓室を造る横穴墓も含んで、おおむね3世紀末ころから4世紀初頭にかけて開始し、7世紀代を通じての長期間を古墳時代に於て、その間に造営された種々の形態の墓を古墳という名称で統一的に理解している。

この時代は、墓造りに特徴があるとはいうものの、鉄器の一層の普及をはじめとする生産基盤の確立と生産性の向上、さらには隣接する中国大陸や朝鮮半島との交渉、列島内での広範な地域間の交流のなかで、一部の階層の人々が突出した形で力を伸ばし、大和政権とか畿内政権とか呼ばれる国家機能が確立する時代であった。人々の生活は飛躍的に発展し、各地で多様な文化が開花したのである。

市域の古墳の変遷を簡単に述べるなら、4世紀から6世紀前半代までは遺体や副葬品さらには棺の材料を現地まで運んで、木棺・石棺・土器棺を直接地中に埋納したり、まれには竪穴式石室と呼ぶ石の部屋を構築してその内部に前述の施設を埋置する竪穴系の埋葬施設が盛行し、それ以降は大きな石を組み上げて横穴式石室を造ったり、やや遅れて始まった崖に横穴を掘り込んで先の施設を運び入れた横穴墓などの横穴系埋葬施設が一般化している。こうした傾向は、もちろん基本的には全国的な動向と軌を一にしたものである。

とはいえ、市域においてはさほど大型の古墳はみられないものの、いくつかの特色ある墓造りの様相が確認される。以下に詳しくみていくが、そのいくつかを紹介しておこう。

まず、数の問題がある。多数のために詳細にわたっては不明だが、外見から判明する小規模な墳丘をもつものが3000基以上、さらに横穴墓が数百基は知られており、現状でおよそ3500基以上の古墳が存在することになる。これは、単位面積に比較して異常に多い数である。

次に、大師山古墳群にみられるような竪穴系横口式石室という特殊な石室の群集状況が指摘できる。付近にある加陽（かや）の地名と、朝鮮半島の伽耶およびその付近の石室のあり方の関連性の問題がある。

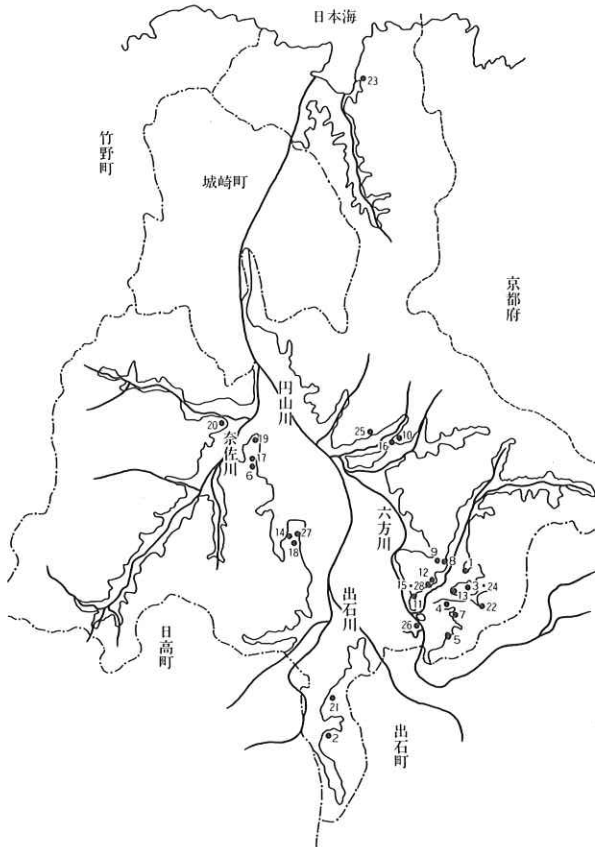
第三には、土師器や須恵器と呼ばれる土器を遺体の頭部に枕として配置する葬制の存在がある。最近の調査で類例が増加しつつあるものの、前者は島根地方の一部から鳥取・兵庫北部（但馬地方）・京都北部（丹後地方）各地方にほぼ限定的に認められる特異なもので、他方、後者はそれよりもかなり広がるものの基本的には上述の地域をカバーしつつ拡大している。

第四に数のこととも関連するが、後期の横穴式石室の数に比較してそれ以前の古墳の数が圧倒的に多い傾向が指摘され、やはり特徴的な状況のひとつであろう。

こうした特質は、但馬規模ないし但馬・丹後両地方を含んだ広い範囲、換言すれば日本海西部地方という大きな枠を与えて考える必要があり、畿内中枢部の古墳を語るのとは別の観点をもつことの必要性を教えている。

市域や但馬地方を主体に考えても、畿内をはじめとする様々な地域からの交渉や干渉が、時間的にも空間的にも一様にあるのではなく、また彼の地の勢力の消長と関連しながら微妙に古墳の形態や内容に影を落しているものと理解される。そうした観点から、以下、市域の古墳を順に説明していくことにする。

なお、単独の古墳や遺跡については従前のおおりに、また特に重要な古墳や古墳群についてはやゝ詳しく記述を進めている。



1	森尾古墳	「正始元年」銘鏡など多数 3基の石室	15	香住門谷古墳群	古手の古墳群
2	中ノ郷深谷古墳群	丁寧な石棺 一墳丘に多数の埋葬施設	16	鎌田若宮古墳群	バレススタイル土器・須恵器転用枕など
3	北浦古墳群	階段状遺構(墓道)と多数の小規模古墳	17	矢谷古墳群	早い時期に実施された小規模古墳群の調査例
4	立石古墳群	遺物をもつ円墳を含む 土師器枕・銅鏡など	18	見手山古墳群	前方後円墳などの調査
5	長谷ハナ古墳群	古手の小規模古墳群	19	下除古墳群	古手の須恵器をもつ古墳群
6	福田寺谷古墳群	古手の古墳群 二重構造の棺	20	亀ヶ崎古墳群	古手の須恵器をもつ古墳群
7	長谷ホウジ古墳群	鍛冶工具出土	21	引野大師山古墳群	竪穴系横口式石室の群
8	カチャ古墳	きわめて丁寧な石棺	22	森尾大内谷古墳群	横穴式石室5基の調査
9	南尾根古墳群	土器棺(土師器)の4基埋葬など	23	風谷古墳	海岸部の大規模古墳
10	鎌田古墳群	古式の須恵器をもつ	24	北浦横穴墓群	計12基のまとまった横穴墓の調査例
11	駄坂舟隠古墳群	古手の古墳群 ガラス管玉・勾玉など	25	日撫正福寺横穴墓群	計16基あまりのまとまった横穴墓の調査例
12	香住エノ田古墳群	須恵器転用枕・銅鏡など	26	上鉢山東山横穴墓群	2基を調査
13	立石山崎古墳群	古手の須恵器をもつ古墳群	27	妙美寺見手山横穴墓群	4基を調査
14	セツ塚古墳群	古手の須恵器をもつ古墳群	28	香住門谷横穴墓群	計7基を調査

図97 市域の主要な古墳と古墳群分布図

4.2 森尾古墳 森尾字市尾

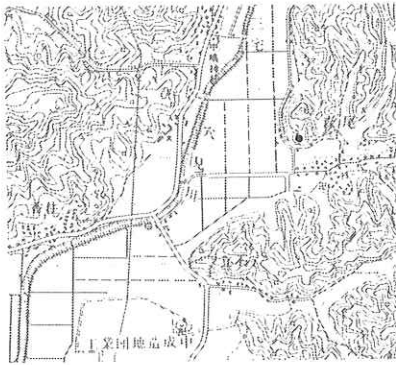


図98 森尾古墳位置図

契機 本墳発見の契機は、大正6年、森尾在住の大地主であった平尾家で、邸宅から少し離れた所に別荘の建設を企図したことによる。地均し工事を始めたところ石室が見つかり、人骨が発見されるにおよんで村は大騒ぎとなった。

発見直後に、県立豊岡中学校に教頭として在職していた堀内清は、発見の報を受けて現地に行き、つぶさに

観察をおこない、その結果を出石警察署に提出している。いま、貴重な記録として、平尾家にその写しが保管されている。

発見後数年を経過して、京都帝国大学から梅原末治が現地を訪ね、また遺物を観察したり、一部持ち帰るなどして研究を深め、次々に論考を発表した。

豊岡市教育委員会では、現状の地形実測を平尾家の協力を得て昭和51年と52年に実施することができ、その成果をもとにかつて『北浦古墳群』のなかで「森尾古墳の再検討」として詳細に述べたが、豊岡市ではもちろん、全国的にみても重要な遺跡であり、かつ貴重な遺物が多いため、その後の調査成果なども交えて再論しておく。

遺構 (以下、堀内・梅原両氏の見解を示す)

一方は、発見直後に現地を観察した地元研究者の、また他方は発見後数年経過して現地を訪れて見聞した中央の学者の見解である。その異同を明らかにしておくことは必要であろう。項目を分けて要点を紹介しておく。外形・外表 (堀内) 付図があるのみで、それによると頂部は南北5間、東西3間の長方形に描かれている。規模・封土ともきわめて小さく埴輪もなかった。

(梅原) 南北の径約5間、東西径は約3間、高さは6～7尺の隆起部にあ

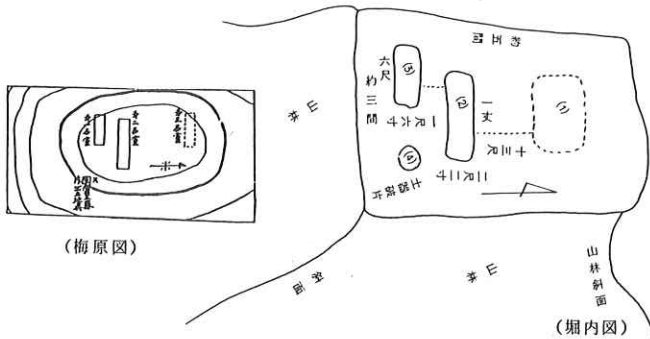


図99 森尾古墳の二墳丘図

り、截頭円錐形で、本来は径7mを超えないもので、高さも2間内外と思われる。葺石は認められず、円筒埴輪もない。

内部構造 内部構造の説明では、両氏でその仮称番号が逆であるため、ここでは梅原氏のもので統一しておく。

(堀内) 第1石室は、第2石室とよく似ているものの規模はさらに小さくなり、底板が認められた。蓋石はやや大きく、内面の石にはわずかに朱の痕跡があった。

第2石室は、地下3尺で掘りあてた。蓋石は比較的小さく、数個の扁平な石が用いられていた。底部には石はなかった。四方の壁面は、単に小さい石片を積み上げて石垣状をなしており、粗雑なものであった。内面には薄く朱の痕跡がみられた。

第3石室は、もともと旧状が凹んでいたようで、地均し作業中の土砂のなかに小さい石垣状のものが認められ、さらに掘り下げて底石と思われるものにあたった。天井石がないことなどから、盗掘がなされていたのではあるまいか。

(梅原) 第1石室は、扁平な割石を小口積みにして4段まで造っている。小さな竪穴式石室で、構成は比較的精雑である。大きさは、東西6尺、南北1尺6寸、深さ1尺5～6寸で底石があった。蓋石は、やや大きな板石が使われており、内壁面には朱が塗布されていた。

第2石室は、地下3尺で天井石にあたった。室は東西10尺、南北2尺2寸、深さ2尺内外で第1石室よりやや大きい。底石はなく、天井部には小型の扁平石が数個横架されていた。

第3石室は、上部が以前より少し凹み、内部はすでに崩壊していた。しかし、他とほぼ同じ形式であったようで、土砂中に割石の壁があり、地下約4尺で底石と思われる石材にあたった。

遺物の出土状況 工事中の発見ということから明らかでない部分が多い。掘内の記述には、個々の遺物の所属についてはほとんどなく、わずかに第2石室に「古鏡、勾玉、管玉、刀剣ノ破片ヲ蔵セリ」と記載されているのみである。他の状況については、梅原の聞き取り調査によるしかない。

(梅原) 不明な点も多いとしながらおおむね次の通りである。

第2石室には、西を枕とする人骨が伸展で葬られており、頭蓋骨は朱に染まり、その南側の壁に四神四獣鏡が立てかけてあり、また付近に木棺片と思われる残片が認められた。遺骸の頸部あたりの土を洗浄したところ、勾玉や管玉を検出したという。この石室には、刀剣類は副葬されていなかった可能性が高い。

第1石室にも人骨が残存していた。方格規矩鏡・刀剣類・銅鏃・鉄鏃などが本石室からの出土のようで、鏡は頭部にあったとされている。

正始元年銘鏡は、第3石室から破砕された状態で出土している。ここからも刀剣類が出ているようである。

また、磨製石斧とされる遺物は石室からの出土ではあるが、どの石室からか不明である。

現在の状況 (以下、市教育委員会調査)

立地 森尾古墳(跡)の所在地は、森尾字市尾である。森尾地区集落の北側には南北に長く狭小な尾根が続いているが、その南の端に位置している。やや詳細には、標高で62m前後の小丘陵状地形は、そこから南と南東の方向に小さい枝脈を派出しており、このうちの南方向に延びる尾根先端部である。

現状は、松を主体とする雑木林となっていて、平坦な頂部には別荘の庭石が所々に散在している。全体として南北に長い地形となっており、その

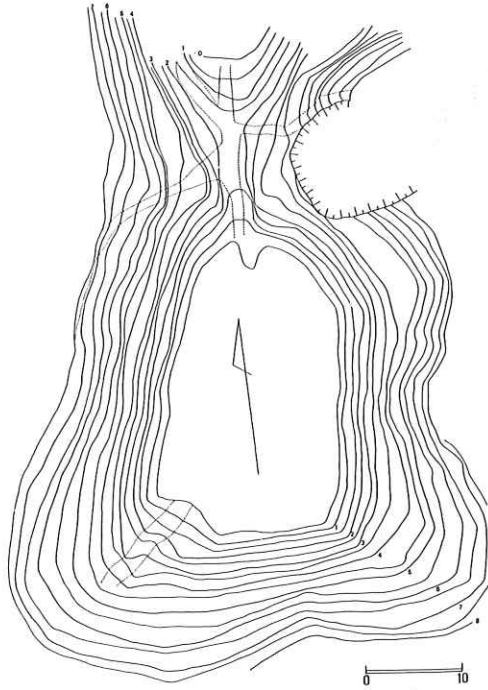
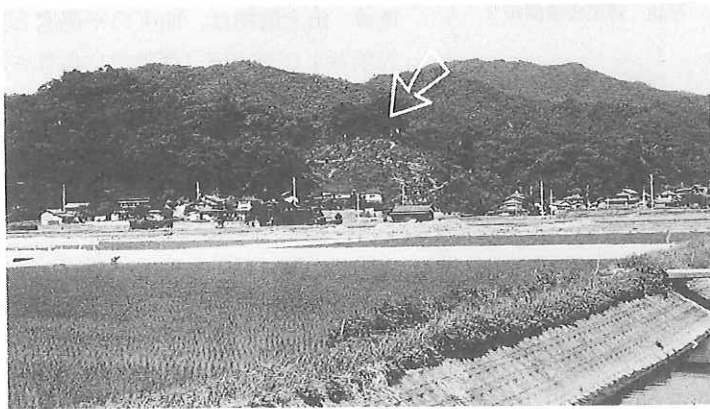


図100 森尾古墳(跡)現況図



写46 森尾古墳(跡)(矢印)の遠望



写47 森尾古墳銅鏡 1

頂部の標高は35mと比較的低い感じを受ける。

地形図を作成したところ、図に示すように南に向けて下降してくる尾根先端部を巧みに利用して別荘地が造成されている。平坦面の大きさは14m×22mあまりを測る。これは別荘地そのものである。

注意しておきたいのは、別荘地の北側が主尾根と切り離されているかのように観察されることである。重要な部分が不明であるが、そうした手法で造られた可能性も残されている。



写48 森尾古墳銅鏡 2

現地形の東と西側についてはかなりの急傾斜となっており、また、南側も同様である。図示は不十分であるが、東は4.5m、西は4.5m、南は5m付近の部分に段地形が認められる。見方によれば、これより下は旧地形が残存しているのかもしれない。後にまたふれよう。

遺物 出土遺物は、地主の平尾家と京都大学および東京国立博物館に保管されている。以下、主要な遺物の概要を述べる。特記しないものは平尾家保管のものを示す。



写49 森尾古墳銅鏡 3

方格規矩鏡 面径12.9cmを測るわずかに反りのある厚手の鏡で、緑青の隙間は黒漆色と白色を呈している。錫分が多いのであろうか。鈕を中心に方形の区画がまわっており、それぞれの角の部分に乳が4個配置されている。

平縁上の外区文様は、いわゆる唐草文様と呼ばれるものが本来は一周しているであろう。その内側には、鋸歯文が配されている。

本鏡は大きく2片となっているが、その割れ目は銹化し、さらに鋭さに欠ける。事情は不明であるが、ことによると副葬以前になんらかの原因で割れた宝器を、大切に扱っていたことによるのであろうか。しかし、文様は鏝上がりりの悪さと銹の進行のために不鮮明であり、よくわからない。

正始元年銘鏡 魏時代の年号である正始元年で始まる銘文をもつところから、一般にこの名で呼ばれる。面径 22.6 cm を測り、三角縁同向式神獸鏡と称される形式名の鏡で、早くから群馬県柴崎の蟹沢古墳出土鏡と同範ないし同型鏡であることが知られており、昭和55年になって新南陽市の竹島古墳（御家老屋敷古墳）出土鏡がこれに加わった。

内区の図柄は、鮮明な蟹沢古墳例をみると、伯牙弾琴の3像・東王父像・西王母像・黄帝像と獣の像からなっており、同様の例は、いずれも魏代の紀年銘をもつ島根県加茂町の神原神社古墳出土鏡や和泉市の和泉黄金塚古墳出土の画文帯神獸鏡の文様構成とほぼ一致している。

正始元年銘鏡は、現在のところ3面が元型が同一の、いわゆる踏み返し技法によるものとみられており、全体に文様の崩れが目につく。京都大学保管。

なお、他例を参照して読み取られた本鏡の銘文は次のとおりである。

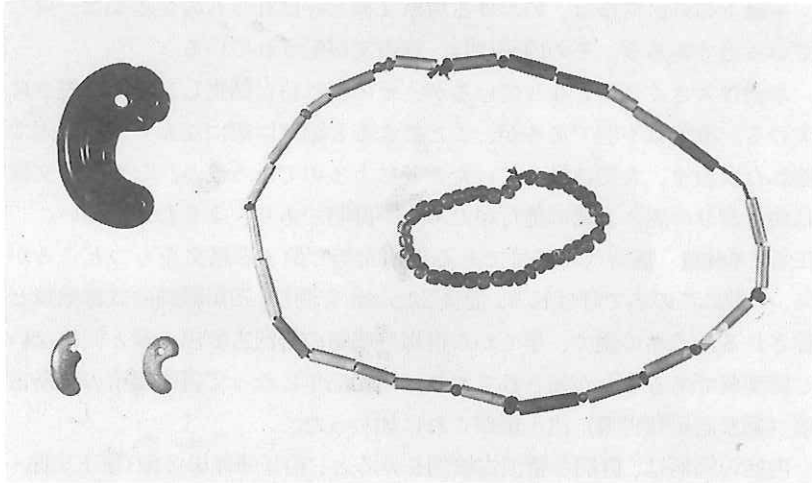
正始元年陳是作鏡自有紀 □杜地命出寿如金石保子宜孫

三角縁四神四獸鏡 三角縁神獸鏡の一種で、四神と四獣の配列法から「見せかけの並列式」と分類されている種類の鏡である。鏝上がりりが比較的良好で、銘文が読み取れる。

三角縁の内側に鋸歯文、波文、鋸歯文、斜線文に続いて銘文帯があり、さらに鋸歯文で文様帯と区画されている。文様帯のなかには4個の乳によって神像と獣像が2体ずつ一対になって配置されている。対になったそれぞれの像は松笠文によって分区されている。面径は、23.1 cm を測る。

この鏡の類例は、奈良県佐味田宝塚古墳出土鏡ほか数例が知られているが、同範、同型のもの未確認である。東京国立博物館保管。

なお銘文は48字からなり、全文は次のように読める。



写50 森尾古墳玉類

新作大竟 幽律三剛 配徳君子 清而且明 銅出除州 師出洛陽
周文刻鏤 皆作文章 左龍右寅 師子有名 取者大吉 長宜子孫

これらの銘文のうち、周は彫、寅もしくは甫と読めるのは虎であろうと考えられる。

玉類 玉類は、堀内の記録では管玉2、勾玉1となっているが、梅原では硬玉製勾玉3・ガラス製勾玉・管玉27・小玉約50としているが、地元には硬玉製勾玉1とガラス製勾玉（ガラス製勾玉）2・碧玉製管玉24以上・ガラス製小玉52以上が残されている。

硬玉製勾玉は、長さ3.4cmを測るやや肉太の作りの精良な遺物である。頭部には3条の刻線を、また身部分の縦方向にも刻線が認められる。

ガラス製勾玉は2個あり、色調はブルー、長さは1.3cm程度の小型品である。

碧玉製管玉は、薄い緑色を呈する長さ6~15mm程度の細手のものがほとんどで、古式古墳に通有の例である。

ガラス製小玉は、多くは色調はブルー、一部に紺色のものがみられる。おおむね2mm程度の小さいものである。

銅鏤 梅原によれば9個の出土が記録されているが、京都大学にはほぼ完

形品8個が保管されている。小さいもので5.1 cm、大きなもので7.3 cmを測る。いわゆる柳葉形の例である。

石杵 やや変質した凝灰岩の自然石を利用して作られた高さ15.8 cmの石杵と呼称される遺物である。梅原は、石斧として紹介しているが、最近の研究では朱の精製に用いる遺物である。頭部の一部を打ち欠いて整形しており、底部はよく利用され研磨されている。現在は、市立郷土資料館で保管している。

鉄製品 鉄製品は、一部が京都大学に保管されているほかは大半が地元に残されている。地元分は資料館に保管している。

鉄斧は、蚕糸による布で幾重にも巻かれた完形品で、長さ7.6 cm、袋部の長径2.5 cmを測る小型品である。

鉄刀は、残存長13.2 cmで刃部幅3.1 cm、厚さ5 mm程度である。これと密着した石突と呼ばれる遺物は、現存長11.2 cm、筒部の径2.1 cmを測る。いずれの鉄器にも布帛の付着がみられる。

鉄鏃は、錆化が著しく形を復元推定しにくい状況であるが、鑿頭式の例である。これらの鉄製品のほかに、ヤリガンナ・鉄剣がある。梅原によれば、これらのほかに鎌残欠があったとされているが不詳。

まとめ 森尾古墳の重要性は、単に遺物のなかに紀年銘を有するすぐれた銅鏡を出土した古墳ということのみにとどまらない。遺物の検討からすれば、かならずしも但馬地方最古の首長墓と規定しにくい面もあるが、城崎町の小見塚古墳・和田山町の城ノ山古墳とともに4世紀代すなわち古墳時代前期を代表する古墳のひとつであろう。

以下、特長的な点をいくつか指摘しておこう。

まず墳丘については、さほど規模の大きくない古墳とみられ、外表を飾る埴輪や葺石類は確認されていない。墳形は、堀内が墳頂部を約5間と3間の長方形にメモを描いており、これを下敷にしたとみられる梅原の図および文は、「此の丘の上は本来ほぼ円形を呈して上部平坦となり、南北の径約5間、東西約3間、高さ6、7尺の隆起部なり」として長円形の図が描かれている。

方形墳の考古学的概念がまだ不十分にしか認識されていない当時、一級

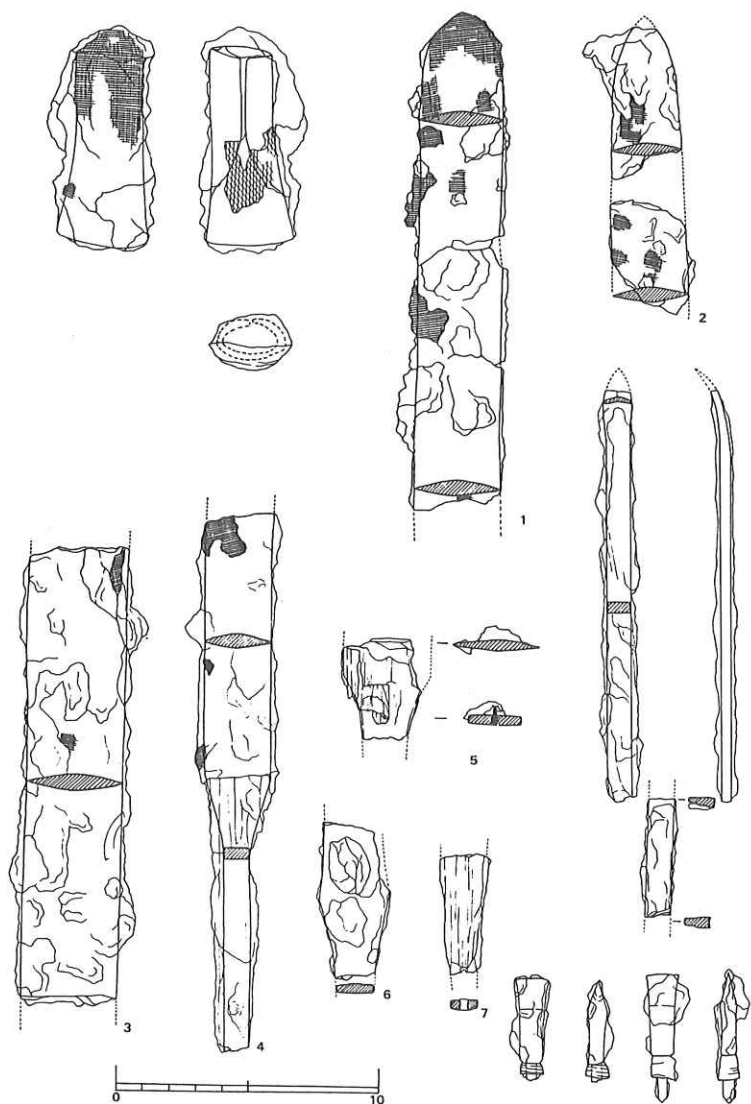


图101 森尾古墳鉄器実測図

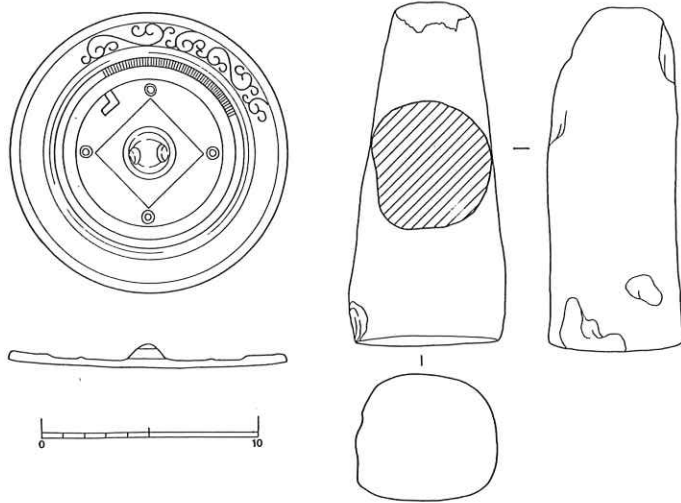
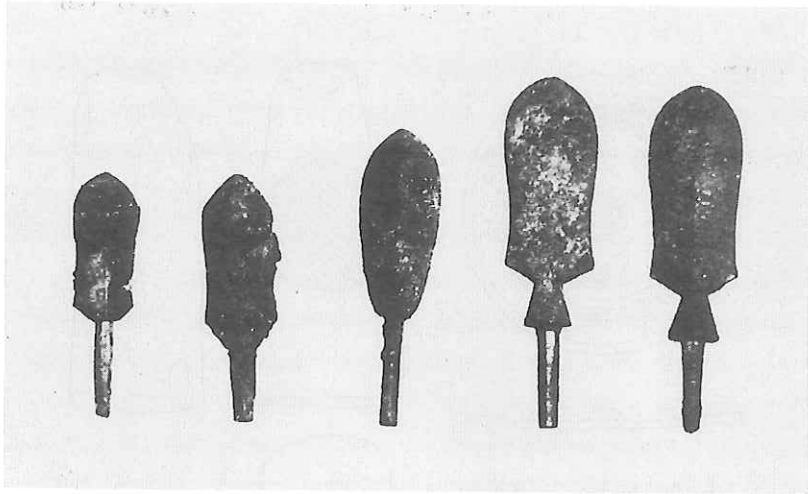


図102 その他の遺物の実測図（森尾古墳）

の研究者であった梅原は、地元研究者である堀内の直感的な観察結果をあえて曲解したのであろうか。結論的には確認調査を実施しないと論及できないが、現状図からは、四隅が突出する方形墳の可能性をここで指摘するにとどめておきたい。

埋葬施設は、梅原の文章にあるように大きなもので3m前後の長さで、一般の前期首長墓に通有の長大な例ではなく、機能的にはむしろ箱式石棺と呼んでよいような施設を3基並列する一墳丘多埋葬の例である。工事中の発見であるため、顕著な埋葬施設のみが確認されたと考えると、木棺直葬などの施設がなかったとは考えにくい。

次に、遺物についてふれておく。鏡類は古式古墳に多いものであろう。玉類も、ガラス玉に新しい要素は認められるものの、かならずしも古い時期にないというものではない。弥生時代の記述のなかでふれたように、後期から古墳時代前期にかけての但馬の墓にガラス製玉類の副葬が顕著であることを考えると、森尾古墳のガラス製勾玉は、当地方の生産にかかるも



写51 森尾古墳銅鍬（京都大学）

のかもしれない。

鉄製品のうち、鍬は形のうかがえるものでは鑿頭式の例で、古式古墳に例が多い。また他のヤリガンナ・剣・斧なども別段新しく考える必要はない。銅鍬は、古墳時代前期から中期にかけてのやや新しい時期の古墳にみられる例である。

石杵の名で呼んでいる石製品は、既述のように朱の精製に用いる製品と考えられる。弥生時代にも例はあるが、古墳時代の例では最古の古墳からではなく、やや新しい時期の古墳からの出土が多い傾向が指摘されている。

こうしてみると、森尾古墳は一墳丘に複数の埋葬施設を有する通有の例である。また、その所属時期については古式の遺物と、やや新しい時期の遺物を含んでいるらしいことが判明しており、かならずしも同時期の埋葬にかかるものとはできない。また、埋葬施設が3基のみとは限らない。

いずれにせよ、但馬地方を代表する古式の古墳で、その出土遺物からして畿内を中心とする政治勢力と無関係とは考えにくい。とは言え、在地色が強烈な古墳でもある。

4.3 中ノ郷深谷古墳群 中ノ郷字深谷

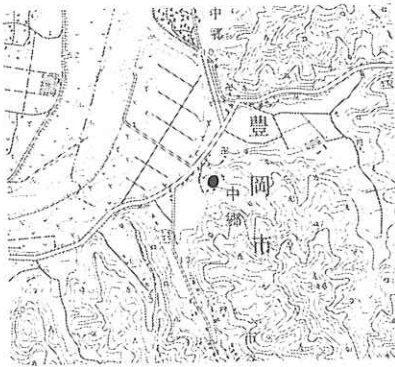


図103 中ノ郷深谷古墳群位置図

契機 本古墳群の存在は、豊岡市が数年間にわたって実施していた分布調査事業によって確認されたものである。その当時、昭和58年の春に地主からの工事（土取り）依頼を受けた工事関係者が現地を確認したところ、古墳状の地形変化に気づき教育委員会に遺跡の有無について照会があった。

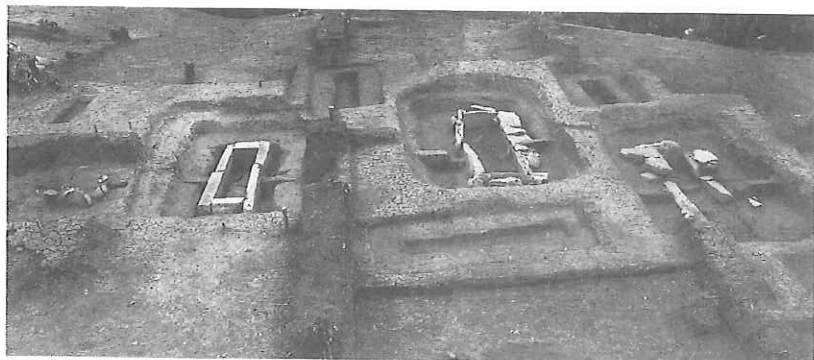
さっそく担当者が現地を観察したところ、多数の古墳が存在していることが明瞭となり、取り扱いを協議することとなった。工事は、以前に家を新築した際に山裾で無理をして土取りをしており、そのために上方にある部分が崩落しそうになったため、その善後策として頂部をカットすることが計画されたのである。

立地 発掘調査の対象となったのは、やや大規模な1号墳とひと回り小さい2号墳である。2基の古墳は、厳密には東から延びてくる尾根続きの先端部に位置している。

一見したところでは独立状を呈する丘陵頂上部に立地している。その標高は約31mで、付近の田面からの比高は23mあまりである。比較的低い立地とすることができる。

1号墳 外形は、頂部の良い場所を占めており、一見して方形墳であることがわかる大型の古墳である。簡単に表現すれば、南北21m、東西は南側では19m、北側では13m前後と大きな差がある。高さは、およそ1.8mを測る。

埋葬施設は、確認できたもので組合式石棺2基・堅穴式石室（後にふれるが、むしろ石槨）1基・土器棺2基のほか組合式木棺5基のすくなくとも10基の埋葬施設が認められた。一部で“切り合い”がみられるものの、基本的には以前の埋葬を意識し、きわめて整然と避けて次の埋葬をおこな



写52 深谷1号墳の埋葬施設配置



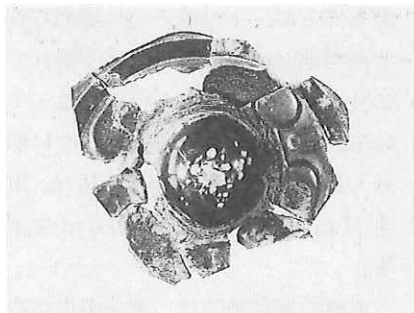
写53 深谷1号墳第2主体石棺

っている感が強い。ここでは主なもののみを紹介し、他は図に一覧しておく。

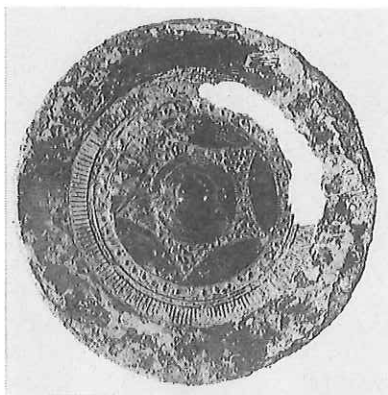
第2主体は、いわゆる“陰石”を用いた組合式石棺である。墳丘の中心部よりやや南に寄せて造られている。2段に掘り凹めた墓壇内に、基本的に6枚の板石によって石棺が組み上げられ、これに加えて蓋石と底石とで棺を構成している。市域の石棺で底石を配するものは意外と例がすくなく、同2号墳が知られる程度である。

棺の内法は、長さ1.66 m、幅は石枕の置かれていた東側で41 cm、足の側で39 cm、また深さは30～36 cm あまりであった。石枕は、石棺と同じ板状の材で作られており、後頭部がのるだけの簡単な凹みが施されているだけである。

第4主体は、第2主体とともに1号墳の中心的埋葬施設で、墳丘のほぼ



写54 深谷1号墳第2主体銅鏡



写55 深谷1号墳第4主体銅鏡

中心部を占めている。構造から考えると石棺と称しても良いが、割竹状

の木棺を埋納した後に石の部屋（むしろ櫛）を造った形式のもので、ここでは石櫛と呼んでおこう。まず、長さ2m・幅45～50cm程度の棺を置き、これを囲むように内法2.2m・幅70cm・高さ50cmあまりの石櫛で覆っている。

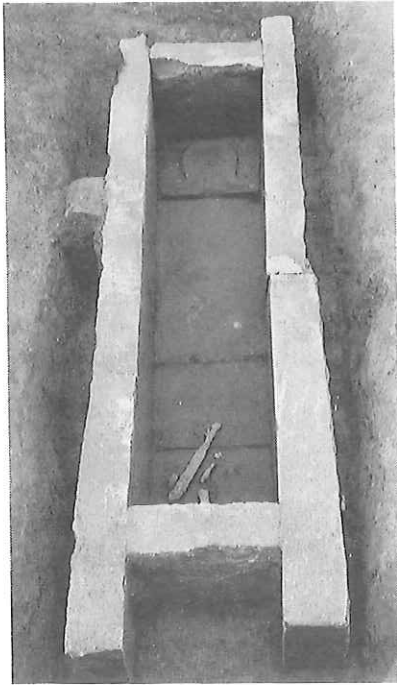
埋葬施設の位置関係から考慮すれば、第4主体が1号墳の中心的埋葬かと考えられるが、第2主体と比較してきわだった遺物をもつというものではない。

遺物について、ここでは第2主体と第4主体についてみておこう。第2主体の副葬品としては、頭位部分の石枕とややかきれいな河原石、破砕されたとみられる後漢鏡の鏡片と針状鉄製品がある。

また第4主体の副葬遺物として、頭位付近から背面を上にした内行花文鏡と小型の刀子が出土している。いずれも鏡という貴重品の副葬であり、それが石利用の埋葬施設から出ている点で注目される。

1号墳は、以上のように多数の埋葬施設を有する例であった。しかし、時期を明示する資料は土師器（土器棺）があるのみである。限定されたこれらの資料によれば、おおむね5世紀前半代の時期を与えることができよう。

2号墳 次に、2号墳について述べよう。1号墳の南西角と接するように造営されており、立地から考えればこちらが後出であろう。それは、規模の



写56 深谷2号墳石棺

点もあるが、1号墳の南に認められる平坦地が南西部分で大きく崩れており、そうした考えの根拠となっている。規模は、やや判然としない部分もあるが、おおむね南北16m、東西14m、墳丘の高さは約1.5mを測る。

本墳の埋葬施設は、墳丘中央に造られた深い墓壙内に納められた組合式石棺である。ていねいな構造の棺で、特に棺内の手法にはみるべき点が多い。まず、底板の一部を構成する石枕は、写真のようにレリーフを施した優秀なもので、それに続く底板には遺体がのる部分を周囲よりやや低くするなど手の込んだ仕事なされている。

側壁についても、外面の仕上げの粗さに対して、内面は丁寧な鑿がかけられており、組み合わせが容易なように切断面が巧妙に仕上げられている。石棺は、内法で長さ1.62m・西小口幅35cm・東小口幅32cmとなっており、深さは中央部で36cmを測る。

本墳からは、墓壙上面での葬送儀礼に伴う土師器の供献があった。土師器は、高坏・低脚坏・鼓形器台・壺などが一括供献されていた。ほぼ墓壙の真上にあたる場所から、墓壙の埋め戻し直後に埋納されたものとみられる。

また、棺内には鉄製品が副葬されていた。その品目は、斧・矛・ヤリガンナ・槍（劍）である。これらが棺内の足側の位置から出土している。まとめ 深谷1、2号墳は、いずれも石棺が中心埋葬施設として使用されている点で特筆される。特に、市域の類例に比較して、底板が施されている



写57 深谷2号墳の土器

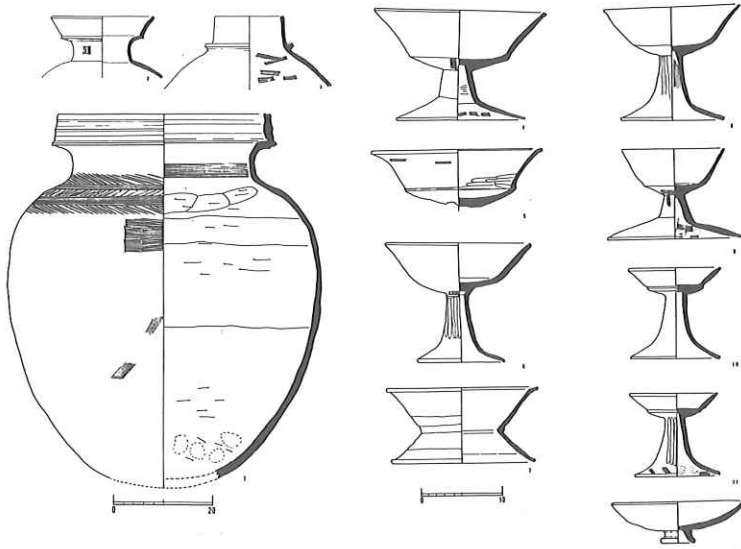


図104 深谷2号墳土器実測図

ことは石棺構造の優秀さと関連して特記すべきことであろう。

具体的な時期や古墳の性格をを明確に示すことはできないものの、おおむね5世紀前半ころの地域首長の墳墓として差し支えあるまい。そして、一墳丘に多葬する点、土器棺や石棺が多用されていることなどを考慮すると在地色の強い古墳とすることができよう。

4.4 北浦古墳群 森尾字北浦ほか

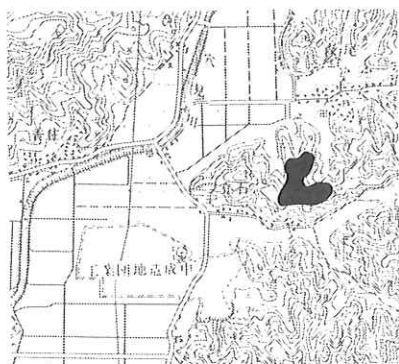


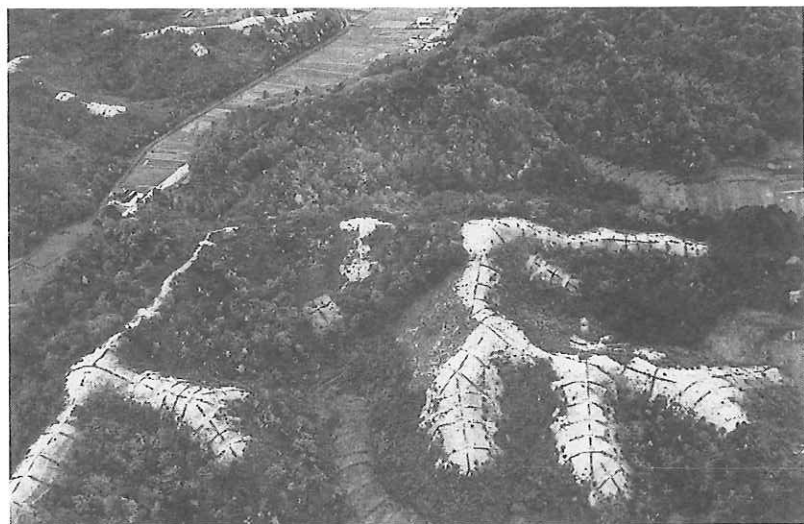
図105 北浦古墳群位置図

契機 北浦古墳群は、豊岡中核工業団地の造成に関連しておこなわれた事前調査でその実態が明らかにされたものである。昭和54年には北浦9～19号地点までの調査が北浦第1次調査として実施され、昭和56年から58年までの間、断続的に18号地点から28号地点までが調査されている。

後にもふれるが、同様の要因で立石古墳群や墳墓群の調査がおこなわ

れている。

立地 北浦古墳群は、付近一帯に分布する古墳群を総称している。立石・森尾両地区を区分する東西方向の丘陵尾根上には、尾根頂部はもちろん、そこから派出する小さな枝脈上にもほとんど例外なく小規模な古墳が分布し



写58 北浦古墳群上空からの状況

ている。尾根を埋め尽くすような状況は、“階段状古墳”群の名もあるほどである。

群中には横穴墓群や堅穴式石室・木棺葬の古墳群・墓道・「殯屋」を思わせる遺構などが含まれている。以下、注目されるものをいくつか紹介しておく。

18号墳 古墳が立地する一連の尾根の頂点に占地するもので、全体的な眺望のうえでも、付近でもっとも良好な位置を占めていることになる。墳形は厳密に表現することは不可能であるが、おおむね径20m・高さ3mあまりの古墳とすることができる。

埋葬施設は、全長6.5mを測る墓壙が二段に掘り込まれ、その両小口にあたる部分には板石が立てられ、さらにその内部を3室に区分するために2枚の板を置いたものようである。中央部分には、土師器の器台が地山に接して配置されており、一見して遺体に伴う枕として利用されたものであることが判明した。

遺物としては、既述したように遺体の頭部に土師器転用枕が置かれ、棺の長側板に沿って銅鏡が置かれ、また布で丁寧に巻かれた刀子も副葬されていた。埋葬施設内部の遺物は以上であるが、墳丘の表土直下から土師器壺の破片が比較的集中してみつまっている。墓上祭祀に伴う土器であろう。

18号墳は、調査対象古墳中では最大規模であり、副葬遺物も少ないものの銅鏡を有すること、次にみる“階段状遺構”の取り付く対象であろうことから推定すると、森尾古墳を造った被葬者集団の次世代で、やや集団を支えた人物の墓と考えられる。

階段状遺構 20・21号地点間の凹んだところから溝状の遺構が検出された。その後の一連の調査によって道状遺構の一部が検出されるにおよび、階段状遺構が“墓道”とも称すべき遺構であることが判明した。

さて、典型的な形で検出された階段状遺構の平面形状は、上端から下端まで直線的でなく、蛇行して掘り込まれている。注意して観察すれば、5回ほど方向を変化させていることがわかる。下方から述べると、最初の段に至るまで確認できた浅い溝状部分は4.1mを測る。ここから西に向き、階段にして1段～5段、水平距離で約3m進む。次の変化は緩やかで、東に

もちなおして6段2.4m進んでいる。以下、交互に6段2.2m西・6段2.4m東・6段2.3m西へと蛇行している。

階段の勾配はほぼ 16° で上昇しており、実際に歩行してみるときわめて楽な昇り降りとなっている。ただ幅が狭いので、やや窮屈な印象はある。

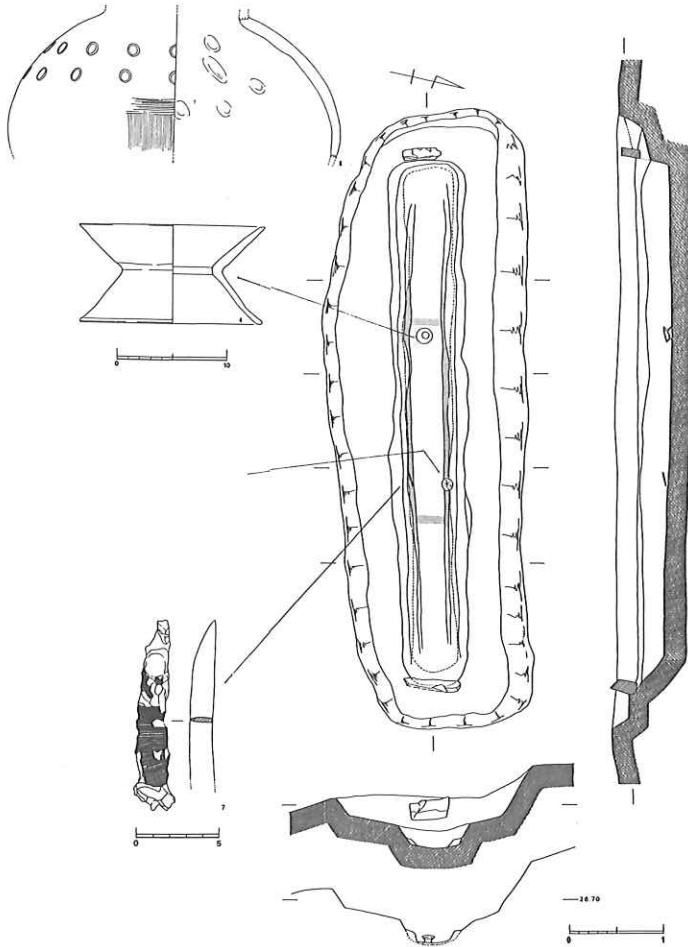


図106 北浦18号墳埋葬施設と副葬品



写59 北浦古墳群中の墓道

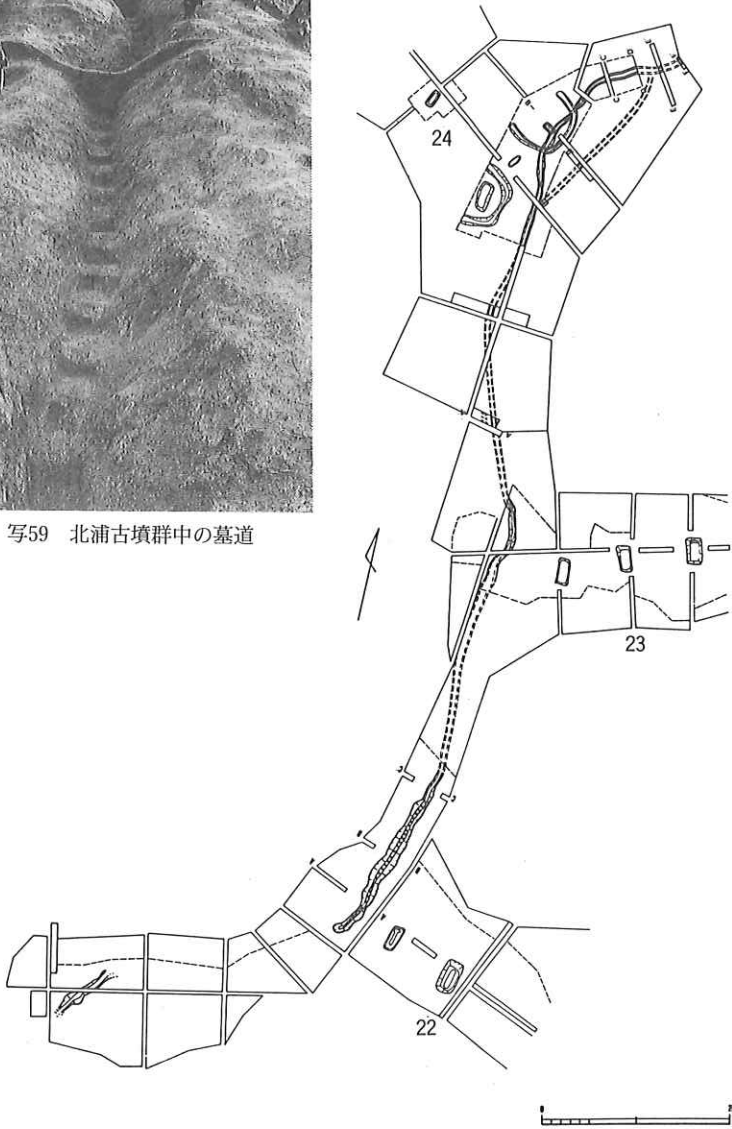


図107 北浦古墳群中の墓道および階段状遺構

この遺構の埋土を観察すると、多いところで4層ほどに分かれ、U字形の堆積を示している。したがって年月の経過とともに埋まっていったものと考えられる。

次に、階段状遺構の時期を理解するうえで重要な点にふれておく。それは、24号地点の2号墳との関係である。

2号墳の周溝と、2か所で重複した溝(道)状の遺構を検出した。これが20～23号地点でみられた階段状遺構や道遺構と一連のものと考えられたので、慎重に切り合いを確かめていった。その結果、道状遺構は2号墳の周溝によって切られている事実が判明し、さらに2号墳周溝内から出土した完形高坏の年代観から、これら尾根上の道状遺構がすくなくとも5世紀後半以前には機能していたことが考えられるにいった。

図に示すように、検出された道状の遺構は本来一連のもので、階段状遺構を含めて道状遺構、もしくは墓道と呼ぶべきものであろう。道が斜面にかかれば、当然のこととしてそこには階段が構築されてしかるべきである。しからば、何を目的とした道であろうか。

22・23号地点頂部に古墳が造られていないこと、それらの古墳が須恵器を保有していないことなどを考慮すれば道状遺構の継続時期を5世紀前半代から数十年の間と限定してよからう。

おそらく、5世紀前半に18号墳の造営を契機として造られた道状遺構は、その後追善供養や、22・23号地点での葬送儀礼に用いられながら、24号地点の2号墳の溝によって道が切られている状況から、同地点古墳群形成開始のころにはその命脈を絶っているかのようなのである。

竪穴住居址 本遺構は、24号地点の古墳群が立地する急激に下降する尾根の先端部に位置しており、レベル差2mあまりで現状の谷水田のレベルと一致する低い場所で、通常古墳の存在は考えにくい場所であった。

ここで小型の方形竪穴式住居址が1基検出された。地形の高い側である南半部は比較的良好に遺存していたが、北側の低い方は流失あるいは削平のため検出不能であった。規模は、東西辺の長さ3.3m、南北辺は残存長で2.1mを測る。仮に正方形のプランであるとしても、床面積が10m²ほどの小型住居である。

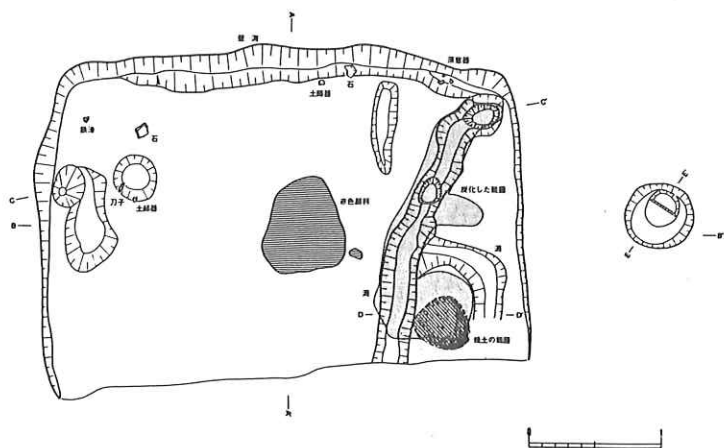


図108 北浦古墳群中の竪穴住居址平面実測図

床面の中央部には、径約 60 cm・深さ 6 cm の浅い円形ピットが設けられ、内部には赤色顔料（ベンガラ）が大量に入れられていた。このピットにはベンガラ以外の遺物は認められず、内面に火を受けた形跡もなく、ベンガラそのものを貯蔵しておくための機能が考えられようか。

床面中央のピットには、ほぼ確実に大量のベンガラが入れており、建物規模からみても通常の住居とは考えにくい。出土した土器からは時期を明確にはし難いが、北浦古墳群の形成時期と重なる可能性が強い。

以上の点から推定して、本古墳群における葬送儀礼に、赤色顔料（ベンガラ）をとおしてかわりをもった住居であり、具体的にはその生産もしくは精製といったこと、あるいは「殯屋」のような機能を考えておきたい。その他の古墳 ほとんどの木棺直葬系の墓（古墳）は、急傾斜地に占地しており、高い側をカットして平坦面を造り、そこに墓壙を穿つという手法を採用している。その際、わずかばかりの溝をまっすぐに掘る場合がある。こうした古墳の墓壙は、例外なく尾根の進行方向に直交して掘削されている。

墳丘としては、低い側は意識が十分に反映されたものとはなっておらず、ほとんどの場合は墓壙部分のみが重視されていたとみている。したがって

墳形といったものは、18号墳を含んで明瞭に墳丘の形状を表現することが困難とせざるを得ない。円墳状をなしているとはいっても、そのことが造墓者の意図と合致するか否かは不明である。

まとめ 北浦古墳群の形成時期を考える場合、群全体の盟主墳的な存在である18号墳と、それへの墓道と考えられる24号地点から22号地点を経て19号地点へと至る道状遺構の存在を無視することはできない。おそらく5世紀前半代に18号墳の築造を主要な契機として群の形成が始まるのであろう。墓道を意識して22号地点や23号地点が相次いで形成を開始し、同時に18号地点・25号地点・26号地点・28号地点のあるもの、第1次調査の11号墳・13号墳などが造営を始めたものと考えられる。そして、それらに続いてやや遅れて眺望のよくない27号地点や平地に近い24号地点が形成されていったものと理解しておきたい。

以上みてきたように、北浦古墳群は5世紀前半代に造営を開始し、6世紀前半代にはおおかたの築造を終えてしまった、わずか100年あまりの間の尾根上の木棺直葬墳を主体とする小規模古墳の群である。遺物は、少量の土器や鉄製品を伴出する程度で多くなく、18号墳の被葬者を盟主とし、その古墳造営を直接的な契機として群の形成を開始した古墳群である。

18号墳の被葬者は、おそらくは小単位地域における長に擬され、各枝群の小古墳の被葬者は彼の下にある構成単位の長もしくは構成員たちの墓域と理解しておきたい。9号墳から18号墳、25・28号地点など群内ではやや優位な一群と、22・23号地点などやや遺物などが乏しい一群に分けて考えるべきかも知れないが、これが単なる時期の差か階層的な差なのか、調査の結果では結論が出せない。

これらの枝群となって築造されていたものが、やがて横穴式石室の時期となって北浦古墳群では横穴墓群を造るようになる。それは6世紀末頃のこと、27号地点の竪穴式石室、おそらく後に述べる横穴墓、22号地点南に位置する未調査の十数基からなる横穴墓群へと終息していくのであろう。

したがって、多数の小規模古墳を造営した小構成単位は、6世紀後半以降は1基ないし数基の横穴墓を造営し、それへの埋納、追葬をおこなったものと理解しておきたい。

4.5 立石古墳群 立石字ヒジグチほか

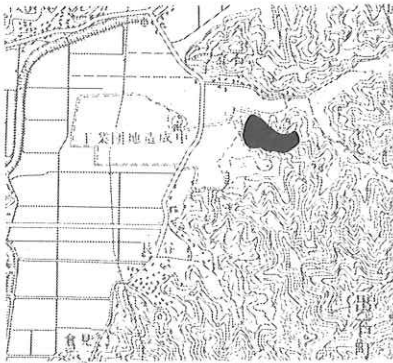


図109 立石古墳群位置図

契機 立石古墳群は、北浦古墳群と同様に、豊岡中核工業団地の造成に関連して行われた事前調査でその実態が明らかにされたものである。昭和52年に104号墳・105号墳・106号墳の調査が実施され、また、昭和55年に107号墳・107-1号墳などが、さらに昭和58年には107-5号墳などの調査がおこなわれた。また、工事が実施されていく段階で、当初は保存が

予定されていた部分でもあらたに調査をおこなう必要が生じ、昭和61年には94号地点・108号墳などで実施した。

立石古墳群についても詳細は報告書によるとして、特筆されるもののみを取り上げておくことにする。墳形の特異な105号墳、土師器転用枕を出土

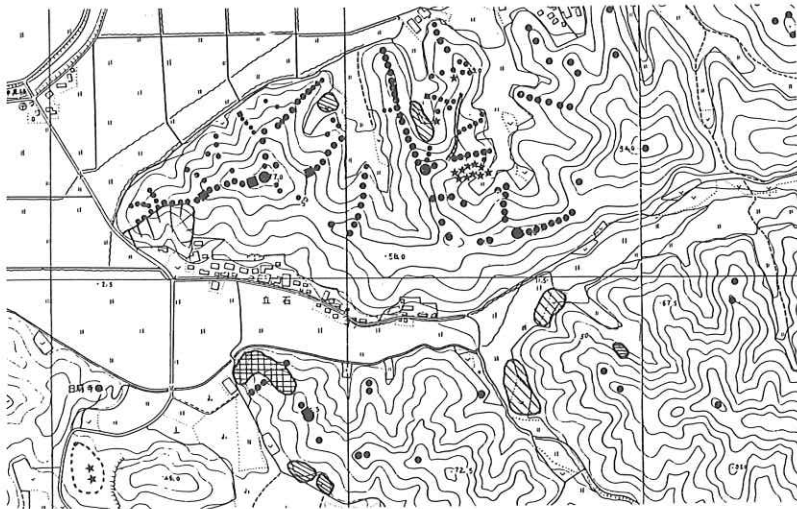


図110 立石古墳群の位置（上右は北浦古墳群）

した106号墳、銅鏡を副葬していた107-1号墳などの概要にふれる。

立地 古墳群は、立石集落の南に東から西に向かって伸びてくる丘陵尾根上に占地する。全般的な動向として、古墳群に先立つ弥生期の墳墓群が尾根先端近くに立地するほかは、古式の古墳が丘陵奥部すなわち高い部分に、また新しい時期の古墳が先端近くに造営される傾向が指摘できる。

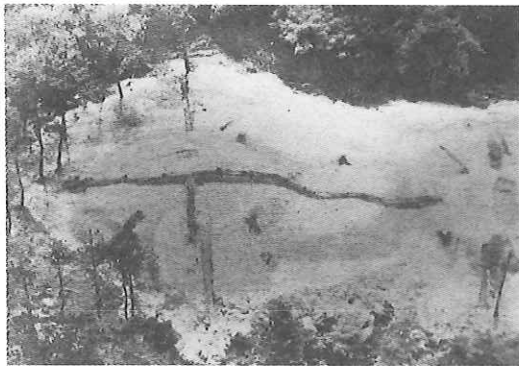
105号墳 本墳は、立石古墳群や墳墓群が立地する主尾根が伸びてきた突端近くに位置し、地形はそこから傾斜を強くして下降していく直前の場所に占地している。標高で約46m付近に当たっている。

本墳の外形は、端的に表現するなら“造り出しを有する円墳”とでも称すべきもので、現状ではやや形が崩れるものの長径15.5m・短径11m程度の円丘部に、先端部の幅8m・接続部分の幅10.5m・長さ7mの方形部分が取り付いた形態を呈している。前方後円墳とする理解もある。

なお、円丘部は東南部はかなりの部分が盛土で、また方形造り出し部分は大半が削り出しによって整形されたものである。

埋葬施設は、円丘部に造られた木棺を埋納した施設である。やや不明瞭であったが、おおむね長さ4.7m・幅1.35mの墓壙内に長さ2.5m・幅は0.58~0.64m程度の木棺を組み合わせた構造のようであった。

遺物としては、通常の木棺葬の古墳に比較すると量的にも質的にもかなりの鉄器を中心とする遺物が認められた。厳密には棺の内外いずれとも判別しかねる場所も含めて、刀子・鏝?・ヤリガンナ・鍬・鋸?・斧・鎌・



写60 立石105号墳の外形

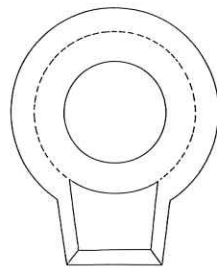


図111 立石105号墳
墳丘模式図

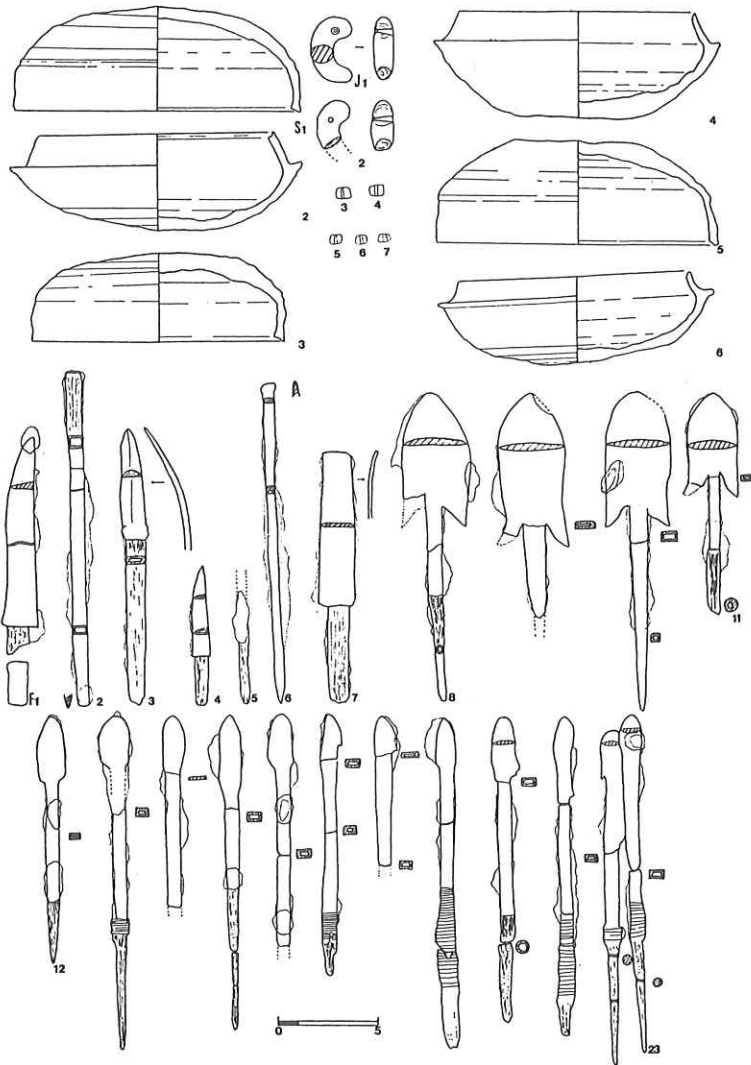


図112 立石105号墳の遺物実測図1

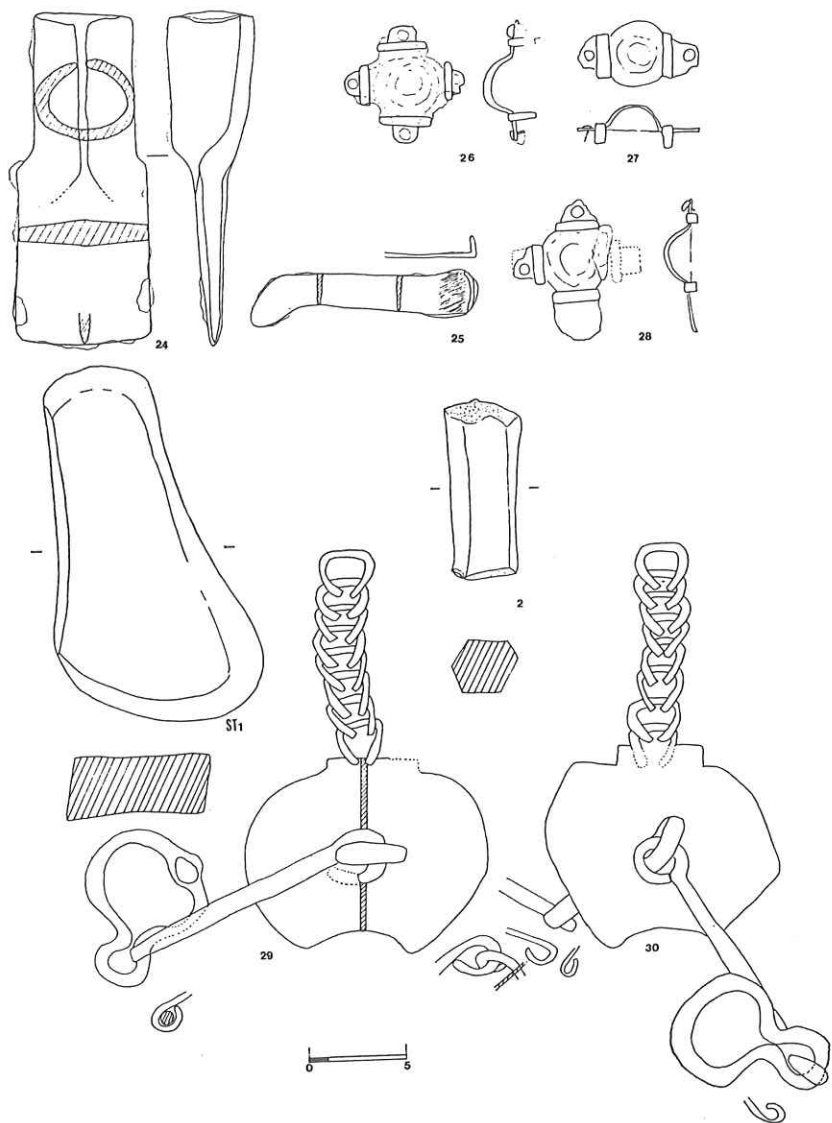


図113 立石105号墳の遺物実測図2

馬具などが出土し、このうち馬具についてみると、鏡板・引手・ハミ・辻金具などが検出されている。

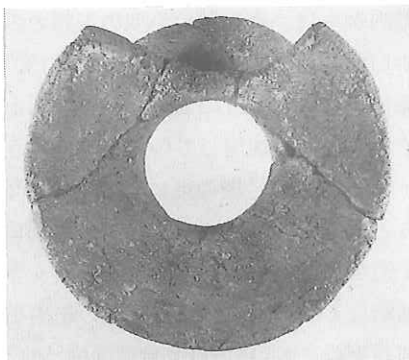
以上みてきたように、105号墳は“造り出しをもつ円墳”とでも称すべき特異な古墳であることが判明した。埋葬施設内から検出されている鉄製品などの質量からしても、当該地域の小単位集団の長の墓と考えられる。

また須恵器の年代観から、本墳の築造時期は6世紀前半代でも中葉に近いころとみられ、隣接する104号墳とともに群内では新しい時期の古墳とすることができよう。

106号墳 本墳は、単独に立地する古墳である。規模は、基底部分が判然とはしないものの、径16m・高さ1.5m前後を計測する。大半は削り出しで墳丘を形成した模様である。墳頂部は、かなり平坦に造られている。

埋葬施設は、ほぼ中心部に造られている。上面の規模は、長径で4.47m・短径で3.35mのややずんぐりした楕円形を呈している。2段に掘り込まれた墓壇内に木棺を組んだようで、痕跡からは2室に区分されていたとみられる。

頭位部分には土師器の器台が置かれており、一見して転用枕の一例であ



写61 立石106号墳埋葬施設と
土師器転用枕（脚部打ち欠き）

ろうと思われた。ほかの遺物で棺内からのものは皆無であった。この土師器は、器台の脚部を打ち欠いて頭がのりやすくしており、高さ 7.3 cm を測る。墓壙上方からは、若干の土師器片が出土しており、土器の供献があったものと理解しておきたい。

時期は、須恵器がみられないこと、土師器の形態などから 5 世紀中葉までのものとみられる。

107号墳 立石古墳群のなかでは標高 51~53 m の比較的高所に位置しており、また、主尾根上に造営されていることから、107-1号墳とともに単位集団の盟主もしくはそれに準ずる者の古墳ではないかと考えられていた。墳丘規模は判然としないが、おおよそ径 15 m 程度かと思われる。

埋葬施設は墳丘の中央部にはみられず、墳頂部をわずかに南にずれた位置に造られている。方向は尾根とほぼ平行している。埋葬施設は二段墓壙内におさめられた組合式木棺で、長さ 4.5 m、幅は中央部で 0.45 m を測り、東の方がわずかに広がっている。

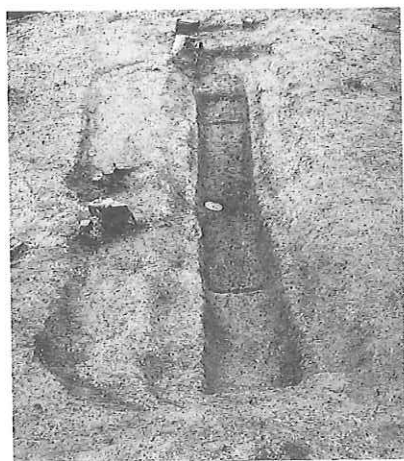
墓壙底には、西側の小口壁から約 0.4 m のところで幅 0.2 m の浅い落ち込みがみられ、小口板を支えるためのものかとも思われる。

棺内からは、滑石製の小型の玉類のみが出土した。出土したのは、東側の小口壁から約 1.5 m のあたりで、勾玉 7 点と管玉 8 点を数える。おそらく頸部にかけてられたものと思われる。出土状況からみて、勾玉と管玉を区別することなく使用していたのであろう。

107-1号墳 107号墳の東に隣接する古墳で、標高 53 m と群内では高所にある古墳である。墳丘は、先の107号墳同様、狭長な尾根の自然地形を利用して造営している。107号墳との境界の溝以外、整形をした痕跡をとどめない簡略なものである。特に墳丘の規模を明示できない。

埋葬施設においても107号墳同様、墳丘の中央部を現状ではやや南にずらして主体部を設置している。墓壙は長さ 4.3 m、幅は西側で 1.2 m、中央部で 1.46 m を測る二段墓壙である。東側については、封土が流出したためか、原形をとどめていない。

墓壙の底部には、両小口部から約 0.8 m~1.2 m のところに 2 か所の浅い掘り込みが認められ、小口板を支えるための穴かと思われる。木棺は組合



写62 立石107-1号墳埋葬施設

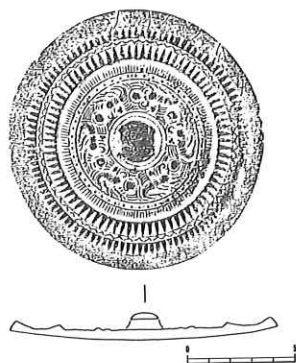


図114 同銅鏡実測図

式木棺で、棺の規模は内法で長さ 1.9 m・幅 0.35 m を測る比較的小型のものである。

棺内から銅鏡 1 面と刀子が 1 点出土した。鏡は、主体部のほぼ中央北側から背面を上にして出土した。面径は、短径が 12.3 cm・長径は 12.4 cm を測る六獣鏡である。現状では同範鏡は発見されておらず、鑄上りは良好である。

まとめ 時期的な事情もあろうが、墳丘の形態が判然としないこと、当然のことながら埋葬施設や墳丘が立石集落の側を意識して造られている点が注意される。すなわち、本古墳群は、報告しなかったものも含めておおむね 4 世紀代に築造を開始し、6 世紀中葉ころまでの地域集団の墓地とみられる。

立石古墳群と北浦古墳群の被葬者たちが、地域のなかでどのような集団関係を取り結んでいたかは不明であるが、全体としては立石古墳群が墳丘規模や遺物の質量で上回っており、古墳造営者の数は多くないものの、ある程度高い地位を占めていたと考えておきたい。

森尾古墳以降の当地域の集団関係、政治関係を理解していくうえで、立石墳墓群の評価とともに見過ごせない古墳群である。

4.6 長谷ハナ古墳群 長谷字ハナ

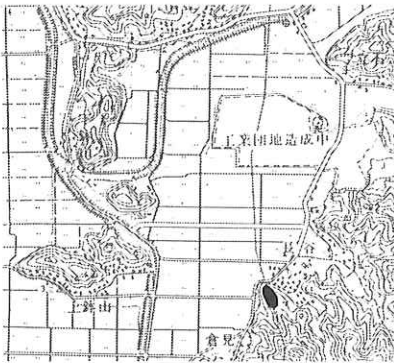


図115 長谷ハナ古墳群位置図

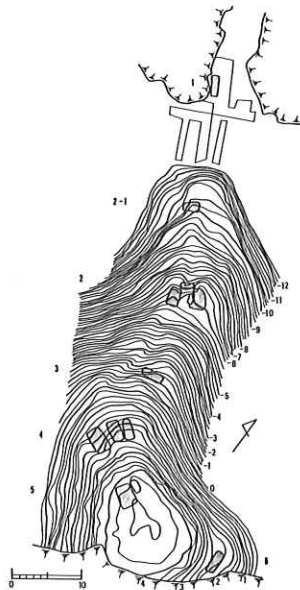


図116 長谷ハナ古墳群配置状況

契機 豊岡中核工業団地の造成のために、用地内に土取り用地を所有していた業者に対して市が提供した代替用地が当地である。前所有地の使用不能ともなつて当該地で雑木処理中に不時発見され、調査費の事業者負担で発掘調査がおこなわれた遺跡である。調査は、昭和56年4月に実施した。

調査の対象となつたのは、1・2-1・2・3・4・5・6号墳の7基である。

立地 古墳群は、立地からすれば尾根先端部の比較的平坦な地形に立地する1、2-1号墳と、急な傾斜地に占地する2号墳から6号墳に分けることができる。はっきりとした墳丘を有するものはなく、いずれも墳丘裾が判然としない例である。いわば墓壇造成のための平坦部をもつのみである。ここでも、主要なもののみふれておこう。

ハナ古墳群は、2号墳で3基、4号墳で3基、5号墳で2基の複数埋葬の例が多い古墳群である。そうした特殊性を中心に述べていこう。

2号墳 斜面に立地する他の古墳に比較するとやや広い平坦部を有して

いる。大きくみれば一辺12m程度の方形墳の状況であるが、方墳という意識は認めがたい。

4基の埋葬施設は、おおむね4m×5.5mの範囲のなかにおさまっており、第1・3・4主体は尾根方向にそった形で墓壙を穿っており、第2主体のみが直交して造られている。いずれの埋葬施設にも顕著な副葬品が認められず、第1主体で刀子、第2主体で鉄鏃、第3主体でガラス小玉と碧玉製管玉が棺内等で認められ、若干の土器片が墓上に供献されていた。

4号墳 尾根方向に造られた埋葬施設が3基、並行して検出されている。地形変化をたどっていくと、急斜面を削平して造成した南北11m・東西7mあまりのわずかな平坦地に造られたもので、直接墓壙が掘られているのはそのうちの7m×4m弱の範囲である。

埋葬施設は、いずれも木の板を現地で組み合わせて構成した木棺を直接埋納したものである。第1主体は、後世の攪乱で破壊されている。遺物は、棺底から浮いた状態でヤリガンナが検出されている。



写63 ハナ4・5号墳埋葬施設上空写真

第2主体は、墓壙の西側が破壊されている。遺物は、第1主体同様ヤリガンナが検出されている。木棺の棺底に埋置したものであろう。

第3主体も西側が破壊を受けているため、全容を十分に知ることはできないが、他の施設に比較すると多くの棺内遺物をもっていた。銅鏡・ヤリガンナ片・玉類で、銅鏡は鏡面を上にも埋納されていた。

5号墳 付近の最高所に立地する埋葬施設2基を有する古墳である。4号墳の埋葬施設の軸と一致しているが、立地の関係であろうか本墳の墳丘は、見かけ上では大きく14~15m前後の直径規模を示しているものの、実際には埋葬施設は西北に寄せて造られている。もっとも高い部分には埋葬施設が認められない。

本墳の主体部は、石棺2基が並列して造られている。大小が認められ、並び方を見したところでは、2基の被葬者は親子関係を示している。

大きな方の棺内には、残存状況は良好ではなかったが頭骨があり、鑑定がおこなわれている。それによると、本石棺の被葬者は頭蓋が全般的に小さく、眉間や眉弓の隆起が弱いこと、大臼歯歯冠の磨耗がそれほど強くないことなどから壮年女性の可能性が指摘されている。

この石棺に寄り添うように第2主体の小石棺が並行して造られているが、棺内には人骨、副葬品とも皆無であった。規模は、長さ0.65m・幅0.2m・高さ0.2m程度の小さいものであった。

まとめ 以上、長谷ハナ古墳群の調査では、小規模古墳の群構造が一定程度明らかにされ、特にその築造時期や順序が限定的に考察でき、また、石棺の被葬者が壮年女性で、かつ隣接する小石棺は幼児用の埋葬施設であろうことなど興味深い事実もわかった。

具体的な被葬者層は明らかではないが、限定される小地域の長と一族の累代にわたる墓地で、おおむね下方から上方に向かって築造されており、この集団にあっては、女性や子供の埋葬もおこなわれたものと理解される。

その他の古墳については、数少ない土器からは4世紀代の古墳が含まれるのであろうとの見通しが得られるものの、積極的に断言できる資料は少ない。したがって本古墳群は、4世紀代に築造を開始した古墳群で、6世紀をまたずに葬地を別に移した集団の墓とすることができよう。

4.7 福田寺谷古墳群 福田寺谷

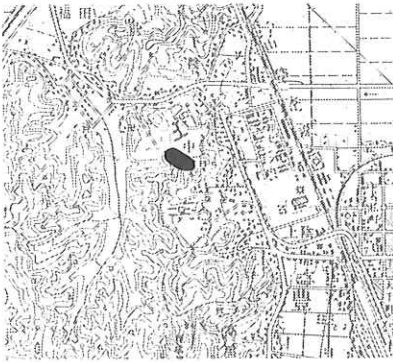


図117 福田寺谷古墳群位置図

契機 生徒数の増加により、校地が手狭となった市立北中学校の整備のため、南西側の丘陵を造成して、新たに屋外運動場を増設することになり、事前調査が実施された。調査は、豊岡市教育委員会が主体となって昭和60年6月28日から昭和61年3月31日までおこなった。

調査では、最終的に6基がその対象となった。内訳は1～3号墳が方

形墳、4、6号墳が円墳で、当初5号墳とした地点は古墳ではなかった。しかし、2号墳の南西下方から小型のテラス状の古墳1基（7号墳）が新たに加わっている。

立地 調査地は市街地の北西丘陵上で、標高53～57mの幅の狭い尾根に立



写64 福田寺谷古墳群上空写真

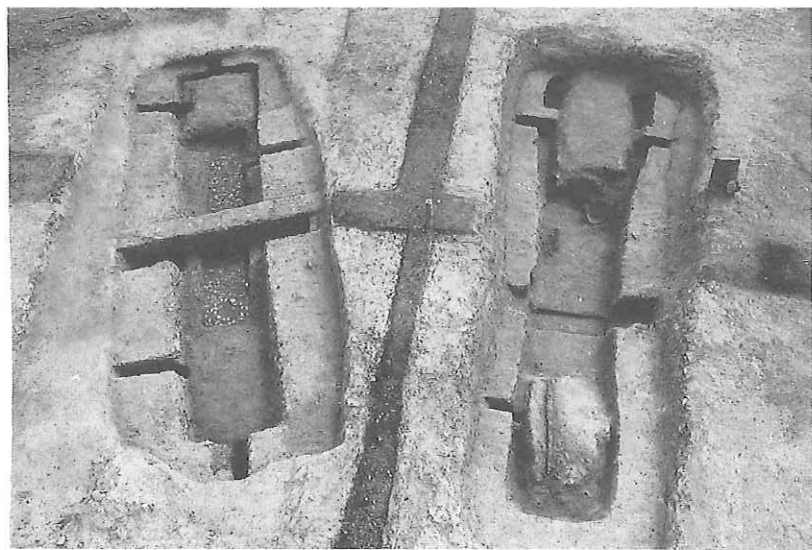
地する古墳群である。最高所の6号墳は北西に延びる尾根が小さく隆起したところに占地し、少し距離をおいたなだらかな部分に1～4号墳が連続している。

ここでは、注目される埋葬施設を有する4号墳を詳細に説明しておく。

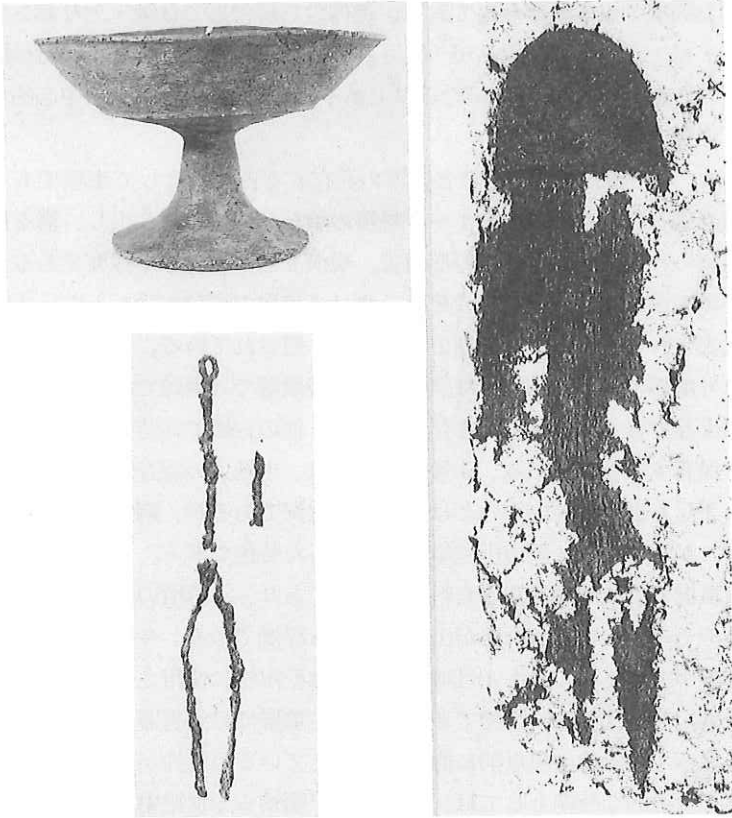
4号墳の墳丘は西半分が不明瞭ながら、一応径14～15mの円墳と考えている。古墳群の中心的位置を占めていると表現できる。3号墳との間には溝が認められるが、5地点側は何ら地山の加工はみられない。

埋葬施設が2基検出され、いずれも特異な構造を示している。まず、第1主体は、4.5×1.75mの墓壙を掘り込み、壙底に複雑な加工を施している。すなわち、遺体は直接的には壙底に設けられた2.0m×0.37m・深さ10cmばかりの礫床土壙内に安置されている。この周囲を二重の板材で囲うという特異なもので、内側の材をいわゆる木棺とみると、外側の材は棺をさらに囲む槨材に相当するものである。棺および槨材の小口材は、それぞれ小口穴ないしは墓壙壁と地山掘り残し部との溝によって固定されている。

なお、礫床は頭部付近を一段高く盛り、さらに後頭部直下を凹ませて安



写65 福田寺谷4号墳の特異な埋葬施設



写66 福田寺谷4号墳の遺物

定をはかっている。遺物は頭頂部分から大型の竪櫛、左頸部付近から針状鉄製品が出ている。

第2主体は、5.0 m×1.65 mの大型墓壙で、2.7 m×0.7 m・深さ0.3 mの下段墓壙内に木棺を組んでいる。この両小口は、しっかりと掘り込まれた小口穴によって固定されている。この棺をさらに囲う槨材の存在が下段上面の加工によって明らかとなっている。第1主体と異なる点は、槨材は棺材より15～16 cm高く浮いたレベルに据えられていることと、槨の頭部側の小口材は存在しないことなどである。

遺物は、棺内南西で土師器高坏の転用枕（完形で坏底部に三方の円孔透

し)と豎櫛3点・鉄斧が出ており、遺体の右肩付近では鎌・ヤリガンナ・ノミ・ピンセット状鉄製品が一括されていた。また足側の棺小口材の間には直刀と鏃5点が置かれていた。以上から、本古墳は、群中での中心的な古墳と理解される。

まとめ まず墳丘では、円墳と方墳の混在する古墳群として市域でも希少な調査例となった。しかも1～3号墳の墳丘は地山を削り出し、溝を掘って区切られた比較的整った方形墳で、規模も当地方では中程度である。

埋葬施設では、7号墳をのぞき、すべて複数の埋葬施設をもち、2号墳に代表されるように集団墓制の色彩が強く残されている。しかし、この中で4号墳の特異な埋葬施設の位置付けは現段階では困難である。

出土品でも4号墳が特別な存在であり、他の古墳では若干の鉄製品と土器を保有する程度である。4号墳の場合は、当地方の調査例としては、かならずしも遺物量が少ないとは言えない状況であるが、銅鏡・玉類を有することがないのは、円山川左岸域に共通した特色である。

古墳群の形成時期を知る資料は不十分であり、4号墳の第2主体部の転用枕やその他若干の土師器が出土している程度である。今後の検討が必要であるが、すくなくとも4号墳については転用枕に使用されている土師器が5世紀前半代ころの遺物であること、古墳群では須恵器の検出が確認されておらず、その出現以前に群形成を終えている可能性が強いことなどにより、全般的な時期としては、4世紀後半頃から5世紀中頃までの幅のなかで理解しておくこととしたい。市内の例としては早く群形成を開始し、かなり短期間で埋葬の地としての役割を終えた比較的めずらしい古墳群の一例と評価することができよう。ただ、本書ではふれないが、比較的近接した池ノ内古墳群が須恵器を有する古墳群として調査例があり、寺谷古墳群後の動向をうかがうひとつの資料ではある。

4号墳埋葬施設に認められる二重構造すなわち榊構造の埋葬施設については、近隣の地では出石町御屋敷遺跡や香住門谷古墳群で類例が検出され、また、その原型の出自は中国大陸やその影響下にある弥生時代の埋葬施設に求められるが、寺谷例がそれらのどこと共通したルーツをもつのか今後の検討課題である。